

礼拝 2020年5月17日(日)

題 『共にいてくださる方』

テキスト：ヨハネ16：25～33

今日の聖書の箇所は、主イエスが十字架の死を前にして弟子たちに話された最後の説教の部分です。主イエスは自身の十字架の死後、後に残る弟子たちへ心をこめた言葉を語られています。

私たちが時に「死」に関しては考えることはあるのではないのでしょうか。

特に今、新型コロナウイルスの感染の中、緊急事態宣言も出され、解除される地域もあるようですが、いつ誰がどういう形で感染するかは分かりません。

いたずらに恐れることはないのかもしれませんが、正しく恐れることが必要だと言われ、そうだと思います。感染して入院したら、重篤になってもう家に戻ってこないことができないかもしれないと思っている人もいるでしょう。わたしもその一人です。事実そのような方々がおられたことを私たちは知っています。

このコロナの時、中世の修道僧の間で毎日「メメント モリ」つまり「死を覚えなさい。」との互いの挨拶があったようです。まさに現代の状況にも当てはまる事なのかもしれません。しかし、静かに深く考えれば、死を恐れることだけではなく、死を覚えることから今から残された神に与えられた時、時間、生涯をいかに生きて行くのかも考えていけるのだと思います。天国への準備、死への備えをして行くこともそれぞれ必要なことだと思わされます。すでに、物の整理などその事に時間を使っておられる方もおられることでしょう。

自分は死に際して言葉を残せるとしたら、どのような言葉を残すのだろうかと思ったりします。一日の終わりには、共に住んでいる人には、心をこめて挨拶はしておきたいと思わされます。ひとり神に祈りを捧げて眠りにつきたいものです。

さて、今日の聖書のことば、イエスの語られた言葉を見ましょう。

イエスは弟子たちに語られました。

**25:**「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。**26:**その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。**27:**父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたか

らである。」

この時弟子たちは、今まで主イエスが、やがて弟子たちの苦難の中での苦しみや悲しみが喜びに変わることを、女がこどもを産むたとえで話されたのですが弟子たちは理解できなかつたのですが、今は、イエスが自分がこの世を去ることを、直接語られたのです。26節の「その日」イエスが十字架につき、神が聖霊（神さまの善き力）を与えてくださるということ、その時から弟子たちに、平安と喜びが宿り続けることを語り励まされます。しかし、弟子たには十分には理解できなかつたようです。

主イエスは、28節で「わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」とされています。神につかわされ、地上で神の御心を表すために働き、神のもとに返るという自覚をイエスさまは持っておられたのです。神に従い生きて行かれたのです。

ヨハネによる福音書3章16節に「16:神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」とされている通りです。これが神の愛と、主イエスが地上に来られた目的を明らかに表している言葉です。

イエスは、神の国、神の真実と愛を伝えて行かれました。そして弟子たちには「互いに愛し合う」ことを教えられたのです。今日、この教えは聖書のことばとは知らない人にも、全世界に広がっています。お寺の看板で見かけたことがあります。イエスは理解されることなく、罪人として十字架につけられ殺されたのです。イエスさまは、わたしたち人間の心や身体の弱さや、罪、心の変わりやすさに対する冷静な洞察力をもっておられたのです。

弟子たちは「30:あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」と返事をしましたが、弟子といえども、イエス自身が受けられた十字架の死の時には自分から離れて行き、見捨てたのです。イエスさまは、そうなることも知っておられたと思います。

弟子たちは、

「30:あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」と語りますが、

31:イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。」「32:だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。」と言われたのです。イエスは弟子の弱さを知り、本当の孤独を、嘆きと悲しみを知っておられたのです。それは十字

架への道でした。

でも、どんな時にも、御子イエスは天と地をお創りになった愛なる神さまと心結ばれていました。

「しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。」

置かれた状況がどのようなになったとしても、主イエスは、共にいてくださる方がおられるのだと信じて十字架に至るまで生き抜かれたのです。このイエスの父なる神への服従と真実が復活への道を切り拓いたのです。それは、誰からも奪われることのない永遠の命です。十字架につけられよみがえられたイエスは、苦難と絶望、疑いと悲しみに勝利されたのです。

ヘブライ人への手紙2章18節「事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練をうけている人たちを助けることができになるのです。」とあります。神の子イエスの受けられた十字架、悲しみと絶望こそが、私たち人間を救う希望の力、今を生かしめる力、原動力となるのです。神さまが与えてくださった聖霊が、今も共にいて励ましてくださっているのです。

十字架の死を前にして、イエスは最後に弟子たちに言われました。33節「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている。」と。ここで言われる、「平和」とは、イエスが十字架で死んだ後、弟子たちが大きな困難にあった時にも、イエスを強く信頼できる心の状態を指したものであると言われていています。苦難と疑い、悲しみは、人間の心を、キリスト者の心を、疑いと不安に陥れる力ですが、神の与えてくださる平和は、どんな時にもまことの勝利者イエスを信頼できるのです。心に平安、安心感を与えられます。イエス・キリストは十字架につき、この平和を与えてくださったのです。キリスト者は、その神の平和をこの世に、互いに覚え合い、祈り合い、愛あし合うことで表し味わって行く幸いの道を生きていけるのです。御子イエスをこの世に送ってくださった神に、誰をも介せず、イエスの名によって自分ひとりで祈りの交わりを持ちながら生きていけるのです。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている。」「苦難」は、「外圧や様々な悩み」でもあり「恐れ、不安、心配」と言えます。「勇気を出さない。」は「元気を出さない。」との励まし。「世に勝っている。」は「世と戦って勝利した。」と受けとって良いでしょう。

わたくしごとですが、この言葉は、わたしが教会に行く前に、初めて目にした聖書のことばでした。家の近くの教会が駐車場に出していた掲示版に記されていた言葉でした。このことばは、今日まで、弱く、臆病なわたしを励ま

し支え続けてくれました。きっとこれからも、天に召されるまで守ってくれる命のことば、力ある言葉だと信じています。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている。」 イエスは、すでに世に勝っておられるのです。疑い、不安、恐れと死に勝っておられるのです。その主イエス・キリストが共にいてくださるのです。神さまに与えられた一日一日を、感謝しながら勇気を出して元気を出して歩みたいと願います。

◆イエスは既に勝っている

- 25:「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。
- 26:その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。
- 27:父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。
- 28:わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」
- 29:弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。
- 30:あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」
- 31:イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。
- 32:だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。
- 33:これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」